しかしこの時期は、「農村-村落的土地所有」を軸とする〈社会共同体の解体〉から〈都市社会〉を形成し、重化学工業中心の産業構造への転換として社会分業体制を再編し、企業の合同集中を図るという日本ブルジョアジーのビッグ・ビジネス＝近代合理主義への目的意識的な追求の時期であった。従って市民的政治の実践を許容しながら、総体として統合してゆくというブルジョアジーの対応であったのはもっともなことであり、運動主体の側も組合主義的運動の枠内という意味で体制-法秩序を越え得ない斗争しか展開し得なかった。またブルジョアジーは民主主義憲法理念＝議会制民主主義を、浸透させつつ生産性の向上が全人民に福利をもたらすが如き幻想を撒きながら「疑似共同体所有」を強調したのであった。こうした運動は、60年安保斗争をもってしても突破できなかったのである。その秋の斗争が議会への圧力運動であったことを見れば知る如く、大衆が市民の枠を越えて政治力程に登場する質を持たなかった。三池斗争も、62年大管法を、そしてブルジョアジー の帝国主義的侵略の転換点と成った65年日韓斗争も依然その枠を突破できなかったのである。日韓斗争以后、激動するベトナム戦争を媒介とする反戦斗争の形成は市民主義運動の揚棄として現出した。一昨年砂川→羽田、佐世保→王子→成田、そして10.21国際反戦新宿-防衛庁斗争として結実したものは、社共と決別した次元での革命的左派の指導する運動＝政治斗争の前進をもたらした。特徴的なのは次の4点である

① 議会主義から訣別したこと

② 組織された暴力としての武装の質を持つに至ったこと

③ 大衆が政治力程に登場したこと

王子-新宿騒乱状況を造出した大衆は、体制内在化した自己の日常性 の定型の超克として自ら猜えに報じ、体制を超え得る自己措定しようとした。それは自己表出としての交通形態を持たぬ大衆の深層に於る「自己変革」の意識である

㊃ 全国の第三潮流との交流-結合の開始

その動揺点の位相と水準はオープンショップ制による自治会が、実質的な斗争の団体として登場し得ないという、40年中大会闘斗争から全大斗争へと受け継がれる力程で招来した情況を更に一層現化させたものであった。セクト的ヘゲモニーによって政治主張が提起されるのではなくて《ノンセクト》がセクトと関係ない地平である程度の運動を形成し、自己切開した后にセクトを選択してゆくという情況を現出した（特に日大斗争において顕著） 従って、自己切開し得ないノンセクトは自らとセクト（政治集団）との結合の媒介項を見出せずに常にプチブル的市民社会の論理をもって情況の中で模索を続け動揺と分解を繰り返すのである。まさにこの現象は意識としての市民社会の論理を実在として市民社会の論理とのはざまに左右に揺れ動く矛盾の困不である

セクト運動に行きついてしまった全学連運動の破産は「ポツダム自治会の破産」という意味に於る運動の到達点を確認する観点から把え返される必要がある。「全学連」に代る「共斗組織」の創出、その前提となるべき「拠点」に於る主体形成-階級形成 の質＝コンミューン的団結」の獲得が早急に要請されているのである

Ⅲ 全共斗運動の獲得してきたもの

この間の全共斗運動 …… は我々に次のような教訓を与えた。即ち学園斗争の発展の問題とは階級的社会革命の問題である事を一層明らかにする斗いとして、自己の学園斗争として自己の大衆へと波及させ大学制度全般」との斗いとして拡大することであり、個別学園斗争は大学批判の同質性」を媒介として、更に国家権力の大学政策（中教審→大学立法）を媒介として全国斗争化する。

次に前衛運動（青医連、都市工学等）や諸戦線との結合を媒介として斗いの領域への拡大を勝ち取り、更に革命的左翼による政治斗争の持ち込みを媒介として、普遍的な社会革命の問題として意識している大衆に対し、政治革命の問題を通してしかそれが（社会革命）進み得ない事を明らかにしつつ、その認識を政治斗争への出発点としてゆく事である。